
とある科学の一時停止(サスペンド)

目黒 良輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の一時停止^{サスペンド}

【Nコード】

N8610Z

【作者名】

目黒 良輝

【あらすじ】

上条が学園都市最強の超能力者・一方通行との死闘の時、学園都市の間では一方通行に似た能力と容姿の少年・一時停止^{サスペンド}が動いていた。触れた物体の向き（ベクトル）を停止させ干渉、掌握出来る能力を持つ一時停止の物語が始まる！！

第一章 壊滅任務 Annihilation duty（前書き）

小説初投稿です、と言いたい所ですがこれで三度目位です。
頑張って書いたのでは是非読んで下さい。

「さあパーティーの時間だムシケラ共」
裏学園都市第一位 サスペンド 一時停止

第一章 壊滅任務 Annihilation duty

ここは第四学区。学園都市でも数多くの料理店が並ぶ場所で、食品に関する施設も多い。

無能力者の武装集団・スキルアウトとはまた違う無能力者の集団のアジトがこの学区の食品を保存する冷凍倉庫を改造している。

このような場所に大抵そのようなアジトは作らない、つまり死角となっているのだ。

今は午後9時頃、大抵の学生はもう寮にいないといけない時間であり行き交うのは帰宅する大学生や学校の教師が多い。

そんな中、黒い学ランを着た断髪の少年は息を切らしながらとある冷凍倉庫へ向かう。少年の手には学生カバンがある。

少年が冷凍倉庫に入るとまず感じる寒さが伝わらない。少年は不可解に思いながら奥へ踏み入る。

奥には男女合わせて20人程度の学生が騒いでいる。ある男は未成年なのに缶ビール片手に携帯を弄^{いじ}っていたり、ある男女は煙草^{タバコ}を吸いながらこつ騒いでいたり、ある男女は大人の育みをしていたりと健全な人達に害を及ぼすような行為をしている。

少年は挙動不審に奥へ進むとある部屋への扉を見付ける。少年は躊躇いなく扉を開ける。そこには緑髪でツンツンな頭をしている青年

が社長室にある椅子に腰掛けていた。少年はゆっくり青年に近付くと学生カバンを青年の前にあるテーブルにゆっくり置く。

「手に入れました……。これが幻想御手です……」
レベルアップ

「でかしたな。晴れてキミも俺達グリフィスの仲間入りだ」

青年は笑みを浮かべながら拍手をする。少年は次第に口元が上がり

「あ、有り難うございます帝王様!!」

「いってことよ。ところでよお、キミ童貞？」

「は、はぁ……」

少年は曖昧な返事を返すが帝王は軽く手を鳴らすと奥から半裸の美

女達が現れる。

「アイツまだ新品だからよお テメエ等の好きにしちゃっていいからあー!!」

「イエーイ」「坊や楽しい遊びをしましょ」など少年に迫り犯されていく。

帝王は犯される少年の模様をにやけながら見ている。しかし、後に大惨事が起きる事をまだ知らない。

同時刻、ある少年も第四学区を歩いていた。少年はスライド式の赤い携帯を耳に押しあてながら歩いている。

『今回は第四学区の冷凍倉庫をアジトにしている無能力者集団グリフィスを壊滅する事だ』

「毎度毎度オレは何時もそのような事しかないのか？」

『統括理事会の護衛とかしたいのか？君はそんなの正に会わないだろ一時停止』
サスペンド

サスペンド
少年・一時停止は電話の相手に珍しく同意する。彼自身、護衛とか守るのは肩身が狭い感じな為不向きだと自覚している。最も正に会うのはこのような人の排除が破壊ぐらいだ。

「反論が出来ないよ。よく読んでるな梶原さんよお」
かじわら

電話の相手・梶原はフツと鼻で笑う。

『何年君の任務を依頼しているのか分かるかい？君の好き嫌いは馴れたのさ』

「そりゃどうも」

サスペンド
一時停止は話の件が過去の方へ行くとはい通話を切りポケットにし

まっ。そうこうしている内にグリフィスのアジトである冷凍倉庫に到着する。

サスペンド
一時停止はハアとため息を吐きながら

「さあパーティーの時間だムシケラ共」

サスペンド
一時停止は冷凍倉庫の入り口付近を触れると一気に前方に吹き飛ば
と同時に粉々に砕け飛ぶ。サスペンド少し規模の大きい事をした為か今までは
しゃいでいた男女は全員、一時停止の方へ向く。
「パーティーはお終いだぜ」

サスペンド
一時停止は辺りを見渡し未成年の違反行為を見てハアとため息をす
ると頭を抱え

「この年で大人ぶるなんて楽しいのかあ？」

サスペンド
男女は一時停止を見て驚愕している。サスペンド実際は一時停止とは知らない

が諸事情の問題である人物に見間違いをしているのだ。

「あれは……一方通行？」
アクセラレータ

「学園都市第一位の超能力者が何故この場所に！？」

驚く少年少女達の中で逆立った金髪でガタイがいい男が一時停止に
近づき
サスペンド

「一方通行か何だか知らねえがテメエが来る場所じゃねえんだよ」
アクセラレータ

ガタイがいい男は一時停止の胸ぐらを掴むが掴んで数秒後、ガタイ
がいい男はバタリと倒れそのまま動かなくなってしまう。
サスペンド

「バカだな。人の能力を知らずに触れるから悪いんだ」

少年少女達はガタイがいい男を見てガタガタ震え出すと叫び声を上

げて逃げ出そうとする。

「オマエらは此処で人生終了だ……と言いてエが、無駄な命は留めてやんよ」

サスペンド
一時停止は右手を構え軽く握る。すると少年少女達の呼吸が一気に止まっていく。止まっていない少年少女達はバタバタと倒れていく仲間を見て愕然としている。

「なっ！？……なんで……」

「簡単な事だ、テメエらの呼吸を停止させてンだよ。つつつても分かンねエよなアどうせ」

サスペンド
一時停止が能力を説明する前に全員呼吸が止まり全員が倒れている。
サスペンド
それを見た一時停止は軽く鼻で笑い

「自業自得だボケ」

サスペンド
一時停止は倒れた少年少女達を無視して奥の部屋へ進む。そこには学ランを着た少年しかいなかった。

「何してんの？」

「あつ一方通行ア！？」
アクセラレータ

サスペンド
一時停止は毎度毎度間違われる為馴れてきたが流石にイラッと来た
サスペンド
一時停止はチツと舌打ちし

「オレは一方通行じゃない。只似てるだけだ。それより帝王って言われてる奴は」
アクセラレータ

「こっちにいるぜえ」

後ろから声が話された為、直ぐ様後ろへ振り返る。そこには緑髪のツンツン頭の青年が立っていた。

「君がグリフィスの首領あたまの帝王か？」

青年・帝王はハハハツと弱者をあざけ笑うような笑いをすると倒れている少年の頭を踏み付け

「そだよ。てか、人の駒をこんなにしてさ正義のヒーロー気取り？笑っちゃうね」

「オレにヒーローっていう綺麗な言葉は合わないぜ。しいて言うなら悪魔だな」

「ヒヒヒッこりゃ面白いなあ。まあ悪魔とかヒーローとか関係ないけどねえ？」

帝王は一時停止サスペンドの目をじっくり見ながら間合いを計っている。一時停止はポケットに手を入れると

「美学が足ンないな。こんなんで帝王になったと思ってンのかア？」

「思ってるよ。何故なら」

帝王は両手を広げると周りに倒れている少年少女達がムクツと立ち上がりゆっくり一時停止サスベンドに近づいてくる。

「精神系能力者が……」

「僕的能力は『電磁支配』コントローラー僕の下にいる人は全員僕の支配下に置けるさ。たとえば仮死状態でも脳に直接に信号を送れるから関係ないんだ」

「人を操って王様気取りとか頭逝かれてんじゃねエのか？そんな位で勝ち誇ってンじゃねエよポンコツ」

「うるさい!!」

帝王は軽く何かを口ずさむと少年少女達は一時停止サスペンドに襲い掛かる。
しかし

「オマエは学習能力がないのかア？」

襲い掛かる少年少女達は一時停止サスペンドに触れる手前でがっちりと固まっている。それはまるでテレビの一時停止に近い状況だ。帝王は軽く冷や汗をかきながらも堅い笑みを浮かべ

「ホントめんどくせエ仕事させやがって……壊滅サスペンドって言われたからよオ。オマエ……」

「死ねよ」

一時停止サスペンドは辺りの床下に落ちている鋭利なガラスの破片を拾い帝王

に向け投げようとする。

しかし、洗脳した少年少女達を前に来させ自身を守る壁を作る。一時停止は仕方なく帝王とは全く別な方へ向け投げる。その姿を見た帝王はガハハハと笑い

「人を盾にされちゃ攻撃出来ないんですかあ？」

「やはりオマエはポンコツだなア。オレの能力は触れた物体を停止、それを掌握・干渉出来るンだぜ。オマエがオレにコイツらで攻撃したお陰で、コイツらの操作を停止出来る。しかし、オマエの能力は電撃使いの派生系でよかったぜ。オマエは脳に微弱な電磁波を送る事で神経の伝達を操作したつつう事だったとはな」

すると盾になっていた少年少女達はバタリと倒れていく。防ぐ術がないが投げたガラスは自身に当たらない方向へ投げた事に気付きにやけ

「だが、あのガラスを飛ばしたのは誤算だったなあ。当たんなきやオレを殺せないぜ、適当に投げちゃ意味ねえよ」

勝ち誇ったように話を進めるが一時停止は軽く頭を抱える。頭が痛いわけではない、帝王の推理力に呆れているのだ。

「やはりオマエはポンコツ以下、クズだなア。オレの投げたガラスにはもう干渉済みだ。後ろ見れば分かる」

帝王は後ろを振り返る。そこには空中に無数のガラスが宙に浮いていた。一時停止サスペンドの能力である触れた物質の向き（ベクトル）を停止させ干渉、掌握出来る事。それは自身が持つ物質も干渉、掌握出来るという事になる。

その理由から一時停止サスペンドが放ったガラスが空間で止まる事が分かる。それを見た帝王は驚愕した顔へ変化し

「絶望を味わえポンコツ王様」

するとガラスは帝王にめがけて真っ直ぐ飛んでいく。避ける術がない帝王はガラスの破片を背中で受け止め、口からは吐血が吐き出される。背中の痛みに耐え切れず片膝を付き一時停止サスペンドを睨み付ける。

「結局……君は……何者なん……だ……」

薄目で開いてる帝王の瞳を見ながら

「オレは裏学園都市の第一位の一時停止^{サスペンド}。名の通り身体に触れるあらゆる向き（ベクトル）を停止、それを干渉、掌握する事が出来る超能力者だ」

「超能力者……八人目だと……」

帝王は意識が途切れその場に倒れる。背中からは深紅の液体が今も流れている。一時停止^{サスペンド}はチツと舌打ちすると学ランの少年に近付くと学ランを掴み

「今回はグリフィスの壊滅だったから見逃してやるが次にオレと会ったら命はねえからな。人生こんな変な場所にいねえで平凡な世界で暮らしてな」

「ひっ！？うわあああああああ！！！！！！！」

手を離すと少年は逃げるようにその場から離れていく。それを気にせず踵を返し道路に出ると携帯が震えだす。携帯を取り出すと『登録1』とかかかっている。通話ボタンを押し耳に当てると何時もの声が聞こえる。

『任務は終わったみたいだな』

「ああ。首領^{あたま}以外は殺してねえがいいよな」

『まあいい。今日は終わりだ。家でゆっくり休んでくれ』

梶原から切ると一時停止^{サスペンド}はポケットにしまい薄暗い夜街を足音をたてながら歩いていく。

第一章 壊滅任務 Annihilation duty (後書き)

前回と言つかダメな小説を読んでくださった方はお久しぶりです。
初めて読む方は初めまして。

目黒です。

今回の作品は私が11月に書いた作品『とある科学の一時停止』を
訂正、編集させた物語です。

11月の時期に書いた時は能力も滅茶苦茶で展開が早いも何ので視
聴者さんに迷惑をかけました。

まだそのような事が残っていて理不尽な展開や一時停止のムチャク
チャな能力に付き合っサスヘンドて下さると有り難いです。

第二章 襲撃と過去 A n a t t a c k a n d t h e p a s t (前書き)

「何だか知らねえが能力者に喧嘩売るとはイイ度胸してんじゃねえか。」

裏学園都市第一位

サスペンド
一時停止

第二章 襲撃と過去 A n a t t a c k a n d t h e p a s t

グリフィスを壊滅してから数時間が経ち午前1時過ぎ。第四学区から歩いて帰ってきた為かもう深夜になってしまっていた。一時停止^{サスペンド}は夕飯を食べていないせいとお腹がすいた為第七学区のあるコンビニに立ち寄りミートソースと炭酸飲料を購入すると再び夜街を歩こうとするが

「よお、こんな時間まで遊んでるとかいい根性してんなあ」

「選択肢は二つだ。財布を渡さずボコられるか財布を渡してボコられ

一時停止^{サスペンド}の前に現れた数人の少年達はヘラヘラと笑いながら近づいてくる。二人目が喋りだすと一時停止^{サスペンド}は近くにあった石ころを右に蹴り飛ばし自身の能力で石ころを停止させ二人目の少年の顎へ当たる方向へ飛んでいく。そんな事に気付かなかった少年は石ころを直撃するとアップパーを食らったように放物線を描いて飛ぶと気絶してしまう。

「野郎……調子に」

少年達の坊主の少年が一時停止サスペンドに触れようとするが触れる直前に止まってしまふ。一時停止サスペンドは片目を瞑りながら

「何だか知らねえが能力者に喧嘩売るとはイイ度胸してんじゃねえか。だがな、喧嘩を売った相手が悪かったなオマエ達の仲間を簡単に殺す事が出来んだ。コイツを殺されたくねえなら理由を説明しろ。は自分では言いたくねえがオレはある奴に似てるって言われてんだ、この姿を見て分かるよな？」

その後、少年達をその場で正座をさせ理由を聞いた。どうやら、学園都市最強の超能力者・一方通行アクセラレータが無能力者に負けたという噂が流れたらしく今なら勝てるかもしれないと襲い掛かったらしい。

（つたく、学園都市最強の名が廃ってんな）

一時停止サスペンドは頭を掻きながら少年達を立たせる。少年達は逃げるようにその場を後にする。実際、本当に学園都市最強の超能力者が無能力者に負ける事が信じられなかった。

サスペンド
一時停止は無意味な情報に頭を抱えながら自宅へ向かう。一時停止
サスペンド
は第七学区にあるマンションに到着すると七階までエレベーターで
上がりある一室に入る。そこは上層部から支給された最大限に暮ら
せる空間だった。軽く個人的な物もあるが。

サスペンド
一時停止はテーブルにミートソースと炭酸飲料を置くとシャワー室
へ向かい服を脱ぎシャワーを浴びる。肌に丁度いい温度のお湯を浴
びながら一時停止はふと思う。
サスペンド

（オレって正式に超能力者になれないのか？）

サスペンド
毎回思う疑問だがつついっ出してしまう。一時停止はその疑問を忘れ
るかのように身体を洗いシャワー室を出る。
新しい服に着替え時計を確認する。時刻は午前4時、完全に朝を迎
えていた。

買ったミートソースを朝飯にするのもいいだろうと電子レンジで温
めると蓋を開けプラスチックのフォークで絡め取り口に運ぶ。それ
を何度か繰り返し炭酸飲料を開けトマトと肉の味がこびり付いた口
を爽やかなグレープで綺麗にする。そして再びフォークで絡め取り
ミートソースを頬張る。

ミートソースを食べ終わるとゴミ袋に食べ終わったフォークと皿を放り込み炭酸飲料を冷蔵庫にしまうとベッドに寝転がり普通の人は起きる時間に目を睨り夢に落ちていく。

*

学園都市にしては広大な土地が存在する。その土地の真ん中には全体が白に染められた建物がぽつりと建っていた。

第3能力開発施設。

この施設では学園都市にきた子供が、能力者の素質があるかないかを調べるためにある。

そして今日も能力開発を行う子供が来た。とある少年もその中にいる。

「僕は強い能力者になるんだ!!」

少年は白衣を着た女性を見ながら言った。

「強くなるのはいいけど喧嘩はして欲しくないなあー」

女性は機会仕掛けのベッドに寝ている少年に言う。

「喧嘩はしないよー、お姉ちゃんを守るんだよ!!」

楽しみだわ、と言う女性。

「そろそろ始めるぞ」

男の声が聞こえて、慌てて少年に脳波を計るための機械を頭に装着

させる。

「じゃあね」

笑顔でどこかに行く女性の姿は、忘れられなかった。

この後の出来事で、本当にさようならをすることになるとは知らずに……。

数時間が経った頃、施設に耳障りな警報音が鳴り響く。

「一号機から五号機に異常が発生しました！」

研究員が叫ぶ。

「脳波に以上が起きています!!」

「心拍数が上がってます！！危険ですよ」

「これ以上は無理です」

次々に発生する事態に研究員のリーダーは

「続けます」

冷たい一言だった。しかし、それに異議を唱える者がいる。

「それじゃあの子達はどうなるんですか！」

女性は抗議をしたが中止にしようとしなない。その時の少年は変な夢を見ていた。

何もない闇の空間。
少年は孤独だった。頭が痛い。

（お姉ちゃん助けて…）

頭痛の中で少年は光を見た

そして少年は無意識に光に向かって腕を伸ばす。

ピーーーー！！

研究施設に無情にも、残酷な音が響いた。能力開発の失敗。
男女合わせて五人の子供の死亡が確認された。女性は自らの無念に泣いている。

「子供の遺体はアンチスキルに連絡をして引き取ってもらう」

研究員のリーダーはまるで何事もなかったかのように呟いた。しかし、その直後だった。

ピー、ピー、ピー

絶望に満ちた空間に再び音が鳴り響いた。

「き……奇跡です、一人の少年が生きています！」

一人の研究員が動揺の声を漏らすと、他の研究員達がざわめき始めた。そして

第3能力開発施設は謎の爆発を起こした。

アンチスキルが到着した時には施設の形どころか、残骸すらなかった。幸いにも広い土地のおかげで、被害は施設だけで済む。

少年は廃墟となった場所にただ1人立っていた。少年は知らぬ内に瞳から涙が滴り落ちていた。少年は残骸の中にあるネームプレートを見て。それはあの女性のネームプレートだった。

「うつ……、うわあああああああ！……！！！」

*

目が覚めベッドから起き上がる。瞳から涙が出ている事に気付くと直ぐ様拭き取り

（またあの夢か……。思い出したくねえ過去を引きずるモンじゃねえな）

寝癖をつけながら携帯を見る。時刻は午後1時32分、時刻を見た後洗面所で寝癖を直し歯を磨く。磨き終わるとソファーに座りテレビを点け見ていると携帯が震えだす。通話ボタンを押し耳に当て

「今日は何だ？」

『まあ任務の内容と話したい事があつてな』

梶原は淡々と喋る。それを無言で聞く一時停止。サスペンド

『まずは任務の内容からだ』

どうも、目黒です。

今回は一時停止^{サスペンド}の自宅や食生活、過去を描きました。

過去と言っても前作の序章と同じ過去です。今回は戦闘回ではなかったのあまり戦闘描写を書いていませんがご不満があると思いますよね…………。

今回は梶原が最後に言った新たな任務についてです。

引き続きお読みになってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8610z/>

とある科学の一時停止(サスペンド)

2011年12月27日20時56分発行